



大佛次郎集

日本文學全集

42

新潮社



Printed in Japan ©

日本文學全集 42 大佛次郎集

昭和三十七年五月十六日印刷
昭和三十七年五月二十日発行

著者 大佛次郎

編者 河盛好藏

発行者 佐藤亮一

印刷者 高橋武夫

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京四七二一九 振替東京六〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 本・神田 加藤製本所

本文用紙 十条製紙株式会社

箱貼カバ 特種製紙株式会社

1・扉見返 表紙布地 望月株式会社

定価 二九〇円

〈落丁・乱丁本はお取替えいたしません〉

目次

地	詩	婦	風	注	年	解
靈	人	鄉	船	解	譜	說
五	九	一七	三三	三	三	三
				河	盛	好
				歲		

大佛次郎集

地 霊

汽車の中

一

平常はそう親しくない間柄でいて、汽車の長旅が、思いがけずうちとけた談話の機会とも成るようなことは我々の経験でも時々起り得る。これは巴里^{パリ}行の急行列車の中のことであつた。コロオニユの駅で乗り込んで指定されたコンパートメントに先客と成っておさまっていた人物と顔を会わせるとウラジイミル・エル・ブルツェフは思わず、

「これは」

と叫んだ。

肥満した軀^{からだ}を退屈そうにしていた先方の顔にも緩慢な微笑^{ほくそ}が泛^はんだ。以前露都の警視總監^{けいし}だつたロプウヒンである。

「お久振りです、閣下」

と、ブルツェフは挨拶した。

「どちらまで？」

「いや、伯林^{ベルリン}までだが」

「いや、それはよいお話相手を得ました。私は巴里まで参ります」

典型的な帝政露^{ロシア}西亜の官僚だつたロプウヒンから見ると、社会運動関係の雑誌を主宰しているブルツェフは警戒といわぬまでも慎重に應對すべき人物であつた。

アゼフの事件の最も新しく權威のある記録を発表したボリス・ニコラエフスキーに依ると、ブルツェフはロプウヒンをつかまえる目的でこの汽車に乗り込んだのだというのだが、そこまでにブルツェフの側で計画的なものだつたと取らなくともよい。たゞブルツェフとしては自分が最近に手掛けている仕事の関係から、この相手のことを時々念頭に置いていて、いつか一度

会って話を引き出して見度いと望んでいたのである。

ロプウヒンは警視總監として一時露西亞の首都で飛ぶ鳥も落す勢いの地位にいたが、現在は全く失脚して恐らく再起の希望はなからうと思われる晩年に在る。

全盛の当時は冷酷で固かつた唇もあるいは誘いようによつては、簡単に、ほぐれるのではないか？

(いや、この機会に是非とも聞き出さねばならぬ)

外套がいのうを脱ぎ、他意ないようにして席におさまりながら、ブルツェフは、こう考えたのである。

ブルツェフは一九〇六年から翌七年にわたつて聖ペテルブルグで史学雑誌「過去」を主宰しながら露西亞近代の政治史を専門に研究して、役所関係にも出入し、再三ロプウヒンに向つて在官中の回想録を寄稿してくれないかと申し出たこともあった。最近の彼は露西亞の革命運動史に興味を抱いて、資料を今の間に整理しておくという史家としての立場以上に、自分の研究を現代政治の紛糾こんきうを解決するのに何か役立たせたいと熱心に働き始めたのが目立っていた。国内では発表が不自由なので、雑誌の発行を巴里に移したのも、その為である。革命運動の資料といえ、警察関係に一

番多く保存せられてゐる。ブルツェフは困難に屈せず、この方面に接近を計つて機会のある毎に官庁の記録を見せて貰うように努力して来た。ブルツェフがロプウヒンと乗り合せて、あるいはこの男ならば知っていないか、と慎重に持ち出そうとした疑問も、実はこの根気のよい調査の間に発見して、大きな謎として久しく真相を知り度く思つていたもので、これは現在の革命黨員の中に露西亞の警察が秘密に入れた密偵が明らかに加わつていて、しかもこれが前衛分子のテロリスト戦闘隊の中でも重要な位置に就いてゐるといふ推定なのである。ブルツェフは、その人物が以前から警察部内の記録ではラアスキンという仮名で記されてゐるのを知つてゐた。しかもラアスキンは現在も極秘裡に活動してゐると見てよい証拠が見つかったので、ブルツェフは無関心でいられなく成り、永い間、あれか、これかとテロリストの有力な顔触れの中に、その人物を突き止めようと努力して来て、まったく最近に種々の状況から、これだとブルツェフが断定を下したのが、人もあろうかと自分が愕然としたくらいに、現在の革命党の大立物の一人であつた。

ブルツェフは自分の推定が不十分で誤っているとは信じられない。現在もその人物が暗躍しているとしたら、その男なのである。その男こそ警察記録のラアスキンに中るのである。そして、その男は、社会革命党の中でも最も古い顔であり、現在の中央委員中第一の信望を集めて、前衛のテロ行動を指揮している人物なのである。この発見は、ブルツェフを熱病に憑かれたような状態に陥し入れた。

他人には話せなかつた。うかと漏らしたら自分の生命を脅かす結果を招きかねないことも判っている。知っていて喋り得ない苦痛が現在のブルツェフを苦しめているのである。

二

このロプウヒンから、どうやって、話を引き出すか、ブルツェフは極めて自然に振舞った。世間話、それから彼らが聖ペテルブルグのどこかの客間で話したように文学のことだの専門の歴史の話だの、——汽車はその間も単調に走っているのだ。硝子の上を、いつまでも同じような原野が走っている。

「あゝまだお話しでなかつたと思いましたが、私の雑誌を巴里へ持って行って出すようにしましたよ」

と、ブルツェフは話題を変えた。

「あちらだと、聖ペテルブルグの検閲では許可にならぬ事項も扱えるものですから」

それから将来こんなことも仕事としてやって見度いという自分の計画や抱負を打開けて、漸く話の焦点を自分の熱中している問題に接近させて来た。

「最近に私の雑誌で、ちよつと興味のある題目を扱って御覧に入れられそうですね。これは、かなり前から調べていたのですが、或るスパイで……警察から送られてテロリストの仲間に入って、それも相当、指導的な地位に上っている男のことなんですがね」

元警視総監はその話に格別の注意も払わなかつたように見えた。が、それまで、かなりにうちとけて来ていた話の調子に急に新しいものが加わって、明らかに慎重に成ったのが看取せられた。ブルツェフは、それも予期していたことだったので、平気で喋り続けてから、不意と語気を変えてロプウヒンの心を打診して見た。

「絶対に確実な話なのです。先生、警察と革命党と、両方に籍を置いて、さかんに活躍しているのですな。

オフラアナ（特高）の方では或る呼び名で通用しているし、テロリストの仲間でも、あれかと人が知らぬ者はない顔なんで……随分、私もこの正体を突きとめるのには骨を折ったものですが、やっともう間違いはないという結論を見つけましてね、証拠も十分なので。たゞ私の発表を見て、容易に人が信じてくれないのじゃないかと思うのですが、……しかし、事実以上に強いものはないわけですから、雑誌に発表したら相対の反響を捲き起すだろうと思います」

ブルツェフは、その話をそのままで打切りそうに見せた。ロプウヒンはその時初めて、興味のある様子を示した。

「どんな話なんです」

「御存じなら」

「いや……何も」

「警察の方では、ラアスキンという名で通っている人物でして、相当有名なはずですが」

明らかにロプウヒンは在官時代の記憶を呼び醒さました

ようであった。知らないのではない。知っていたのである。しかし、彼は慎重に無知を装っていた。

そこで、ブルツェフの仕事は、自分がどこまで調査して確実に知っているかということ、更に詳細に具體的な事実を挙げて証明して見せることであった。官僚の秘密主義で固まっているロプウヒンも、精確なデータを示されてこれが自分の知っている事情に符合しているのを発見すれば、是非なく鎧よろいを脱ぎ去って、自分の意見を言うように成るのである。ブルツェフがこの論証に確信があったのは、話の資料をロプウヒンの指揮下に在った警察部内から得て来ているせいである。もう一つは社会運動の史家として、反対側の陣営から得た知識をも持ち出し得る。そしてこれはロプウヒンが全く不案内の事情で、つまり初めて聞く話だから、興味を起さずにはいられないだろうという強味である。

「昔話になる」

とロプウヒンは遂に口を割った。

「退官してから大分になるし、私ももう当時のことは、あまりはつきり覚えておらんのだが」

ブルツェフは怯まなかつた。

「結構です、まあ、私の話を聞いて頂きましょう。これでも調査には相当骨を折ったものですから」

三

アレクセイ・アレクサンドロヴィッチ・ロプウヒンは帝政下の典型的な官僚であつた。

家の名も遠く露西亜の伝説時代に遡さかのぼつて発見せられたが、オリヨオル県とスモレンスク県に、千エーカーの土地を父から譲られていた。二十二歳でモスクワ大学を終えると司法省に入つて直ちに順当以上に速い出世を始めた。

大学生時代は当時の風潮を受けて穏和な自由主義者でモスクワの検事局を振り出しに官途に就いてからも理想家肌らしいところがあつたのである。しかし間もなく命ぜられて特高警察の監察をすることに成つてから、オフラアナ（特高）の仕事が彼の専門となり革命運動の抑圧に働くことに成つた。当時のオフラアナの長官は有名なズバアトフであつて、これが若いロプウ

ヒンを敏腕と認めた。ロプウヒンは密偵を操縦する仕事さえ知るようになり、かういふ部内でも人が知らぬ「味方」が秘かにズバアトフに会いに来た席にも立会う特権を得てから、いつかズバアトフの仕事の心酔者と変化して来ていた。

一九〇二年に中央を離れてハリコフの検事局へ転任に成つたが、ここに在任中に、内務大臣のプレヴェが地方の農民が不穏なのを視察に来た。その機会にロプウヒンは社会運動に対する意見を問われて、内相に有能を認められた。ロプウヒンは上からの革新の必要を説くと同時に、革命運動に対しては強い圧迫を施すべきだと主張したのである。直ちにロプウヒンは、ズバアトフの方針に依つて地方の農民に臨んだ。それが成功を認められてから遽かに抜擢せられて中央の警視總監の大役に就き、在来ズバアトフがモスクワだけに試みて来た政策を露西亜全土に向つて採用することに成つたのである。年齢はまだ三十八歳の検事だつたから、非常な出世で知遇に感激してプレヴェ内相の片腕として働くことに成つたのである。

内相が企てた上からの革新の方は、帝室を中心とす

る反対があつて、机の上の企画で終つたが、その代りに自然と「政治力」の強化が必要となり、ズバアトフが起用せられて、全土にわたる革命的組織の内部にスパイが配置せられた。費用は莫大なもので、過去数カ年に蓄積せられて来た内務省の予備金が二三年間に費い果された。

当時のロプウヒンは得意の絶頂に在つた。自身は自由主義的傾向の男で憲法を夢見ていたが、官界の車輪が彼を捕えて了つて、放さなく成つたのである。動き出したのは理想や感情ではなく、椅子と出世が保証せられて行くかの問題であつた。秘密裡にスパイが送られたのは革命運動の陣営だけではない。その性質も目的も複雑化して発達した。理想家肌だけに直接にその用務に触れるのを避けていたのは最初の内だけのことであつて、こういう暗い仕事は、何としても自分が暗室に首を突込まないと安心成り難く信じられて来るものであつた。ロプウヒンは、いつかこの仕事の大立物と成つていた。次の内務大臣の呼び声さえ起つて来ていたのである。

数度の果断な弾圧に依つて、一切の革命運動は屏息

していた。当然なことで、思想運動がテロリズムの色彩を帯びて来て居たのである。これに對して、ロプウヒンは怠りなく「打つ手」を打つて来た。ロプウヒンの将棋は多種多様で、水も漏らさぬ秘密警察の網を張り、ブレエヴェ内相と自分が、何の不安もなく、政務を見ていられたものであつた。

その時から六カ年の月日が経つて、ロプウヒンは失脚して野の人として伯林行の汽車の客と成つて居る。そして偶然、落ち合ったブルツェフのような男が、確信を以て、あの時代のロプウヒンの仕事の内容に触れて話が出来ると主張しているのだ。それも当時の自分の持駒の一つが、テロリストの首領の一人と成つて居るといふのだから現在には全く自分から切り離して興味さえ失つて居る過去のこととしても、やはり無関心ではいられない。近年はおのれから忘れ去らうとして来た過去から、ロプウヒンは不意と呼び戻されたのである。

四

ブルツェフは、無雜作に話を續けていた。

「ブレエヴェ内相が暗殺された時も、『彼』は下手人

のテロリストの中にいたのですよ。しかも、陰にいて指揮していたのです」

信じられぬ、と、ロプウヒンは呻き出すところである。ブレエヴェ内相こそ官界における彼の無二の支持者で、親分であり、その人が暗殺された為に彼の失脚に拍車が掛けられ、ロプウヒンの野心や希望が一時に粉碎せられたのである。ブレエヴェが生きていたら、ロプウヒンの運命はもっと別の道を歩んだわけではなにか？ その暗殺が、ロプウヒンがブレエヴェ内相その人の同意を受けて送った「駒」の一つの仕事だったというの意外なことである。

無感覚を装っていて、ロプウヒンは問い返した。

「さあ、証拠でもあるのかね」

「有ります」

ブルツェフは、歴史家にふさわしい冷静さと緻密な気性を示した。その上に前にも記したとおり彼はこの事件に対して、物に憑かれたような執拗な熱情を隠している。確証はテロリストの側から見出されたし、警察の側にも当時の記録がある。ブレエヴェ内相がダイナマイトで馬車ぐるみ粉碎せられた時、「彼」は、

現場に来ていたのだ。そして警察の関係ある部分と連絡し、面談して立ち去った事実を後に残しているのだ。その時日も場所もブルツェフは警察の記録から拾い上げて来たので、一々明瞭に言うことが出来た。ロプウヒンに当時の記憶があるはずである。

ロプウヒンは相変らず口重く沈黙していたが、初めて顔色が動揺した。

「さあ、確かだろうか？ つまり、その『彼』が、ブレエヴェを暗殺する計画を知っていたかということだね」

「特高の記録では、無論、知らなかったということに成っていますよ。が、テロリスト側から得た情報を総合すると、知らなかったどころではなく、『彼』が指揮して一切を計画し、実行に当たっていたのですね」

「……………」

「現場に『彼』は来ていました。何でしたらテロリストの側で、どういう風に手順を運んだか、くわしくお話し申上げましょうか」

「どうぞ。ウラジイミル・ルヴォヴィッチ」

有り得ぬことだと強く見返した目の色であった。プ

ルツェフは、また、この不信を容赦しないのだ。ロプウヒンの自信は動揺して来た。プレエヴェ内相が暗殺せられた後に新たに内務の椅子に就いたのは、マイルスキー公爵で、この人はまだロプウヒンに好かつたのだが、帝室中心に公爵個人に対する風当たりが極端に悪く、その陰險な攻撃の表面に取上げられたのが、警察の怠慢というロプウヒンには誠に致命的な問題だったのだ。もと秘密警察の立物でロプウヒンが退職させたラチコフスキーが皇帝の側近に有力な友人があるのを利用して、攻撃の火の手を拡げて来た。プレエヴェ内相の睨み（にら）が利いている間は動きの取れなかつた人物だったが、プレエヴェが暗殺せられたので急にのし上つて来たのである。ラチコフスキーは、ロプウヒンの手を熟知しているから、敵に回して扱いくかつた。加えられる打撃の一々が、ロプウヒンには身にこたえる苦しいものがあった。そこへ突発したのが、皇帝の叔父で宮中で有力だつたセルゲイ太公が、またもや、テロリストが投げた爆弾で、街頭で暗殺せられたことである。首都衛戍（たいじゆ）総督のトレポフが予告もなく総監室へ飛び込んで来て面と向つてロプウヒンを見るなり、「貴

様の仕事だぞ、人殺しめ」と一語だけ叫ぶなり出ていったのをロプウヒンは今も忘れていない。その日の内にラチコフスキーが首都の治安警察の全権を託せられ、内相が事件を奏上に参内した時、皇帝は警視庁は何をしているのかと鋭く不満を漏らされたというのだから、ロプウヒンは二度と復活出来る希望はなく、退官せざるを得なかつた。

「セルゲイ太公の暗殺を計画したのも彼だったのです」

とブルツェフは説明した。

「テロリストを率いて潜入し準備してあつたダイナマイトを現場近くで手渡してやつたのも『彼』、ラアスキンでした。信じられぬことと仰有（おほ）るでしょうが、私が革命党の方面に手を回して当時の事情をいろいろ調査して得た結果は、一致してそれを説明しています。もう少しこまかく具体的に申上げましょうか」

ロプウヒンは石のように重く沈黙している。彼にはたゞ夢のようなことなのだ。飼犬に手を噛まれるというが自分が使っていたスパイが、そこまで自分を裏切る。自分の政治的生命を全く断つような苦い思いをさ

せたのが実にその男だったと言うー 信じられぬことだ。しかし、これが自分の政敵ラチコフスキーなどが楽屋に隠れて、その男を踊らしたものだとしたら？

「太公の暗殺を境として、ラアスキンの造り口は一変しています。非常に慎重にもなったのですが。……」

と、ブルツェフは告げた。

「また、その計画も以前のように成功していない。殆ど未然に計画が漏れて了っている。党員がさかんに逮捕されましたし、暗殺の遂行前に危く逃げるといった調子なのですな」

ロブウヒンは陰鬱に言い出した。

「ラアスキンが売ったというのかね！」

「そうかも知れません。とにかく『彼』は成功していませんし、非常に慎重に成っています。テロリストの活動の全部が消極的に成ったと申しても宜しい」

五

古い傷が口をひらいて疼き出してた。

未練深く退官してから六カ年余りを経ていた。ロブウヒンも漸くこの過去から解き放されて平凡ながら静

穏な老後の日を迎えようとしていたところである。今から思えばどうして、あゝいう世界に加わって夢中になっていたことかと思ふ時さえある現在、その過去が、ロブウヒンの胸に蘇って来ていたのだ。記憶の覚束ない部分さえ既に出来ていたが、断片だけが泛びながら鮮やか過ぎて声も出そうな無気味な情景もあった。彼が使っていたスパイの顔や風采が幾つか思い泛んだ。連絡する場所も部内の者にも秘密に庁内の一室と定めてあった。冬の日の裸かの壁と暗い光、諺どおり「金だけはよく払ってやるが全く尊敬は出来ぬ」スパイ達はそこで待っていてロブウヒンを見ると急に直立して恭々しく迎える。こちらは人間的な敬意は更に感じないでいることでロブウヒンからいえば、この会見は単純な事務であった。凶々しい面構えの奴はあっても、妙に卑小な印象が彼らに共通していた。人間として遇するに足りぬ卑しい男女なのである。

しかし、その一人がロブウヒンの政治的生活を全く葬り去るような裏切りを働き得たのだろうか？ 信じられぬことだった。だが、ロブウヒンは敗北して引退って来た。余儀なくそうせざるを得なかった。たか

が、あんな虫けらのような奴らの仕事で！ 愚痴も及ばぬのは無論だが、遠い過去のこととしても目もあてられぬように惨憺たることだった。次の内相候補とまで世間が見ていたロプウヒンなのである。

その過去は、近頃もロプウヒンが思い出して心を寒くするような闇で囲まれていた。愛想と儀礼はあるが、その背中に女のような嫉妬や怨恨の影が冷たくつまれていた。宮廷という歴史的に特殊な雰囲気の中から、様々の暗流が漂い出て、人を有頂天にさせたり絶望の底に突き落した。ロプウヒンが今も忘れられぬのは後に伯爵と成ったヴィッテが首相の時、警視総監の自分のところへ極秘の密談に来て、明らかに聞けば慄然と成らざるを得ないような申出を仄めかしたことがあったことである。ヴィッテ首相はもともとブレエヴェ内相と仇敵のように悪かった。その上に皇帝が例のように前約を簡単に更改して首相としての立場を全く失わせて政治的な窮地に陥ち入っていた際のことであつたが、ロプウヒンが手中に握っている密偵の誰れかを使って革命党がやったように見せかけて皇帝の生命を締められぬものかと、真剣な態度で相談を持ちか

けて来たことであつた。ニコライ二世に代つて帝位に昇るのは皇弟のミハイルで、これは全くヴィッテの勢力下に在る。もとよりロプウヒンは、十分に厚く酬られる。当時のロプウヒンがブレエヴェの下に在ったことも承知で首相はこう切り出したのである。話はうやむやに終わったが、ロプウヒンの過去の政治生活の中でも、その後も時折思い出してその時の危機の深さ重大さを思つて慄然と成るくらいの事が、至極、平静に、普通の話題のようにして取り上げられた。そういう情景が闇から浮き上つて出て来て不思議のない世界！それが当時の官界であつた。

その時、ロプウヒンを失脚せしめたブレエヴェ内相の暗殺も、セルゲイ太公の暗殺も、誰れがやったという事に成るのだ？ テロリストか？ 回し者のラアスキンか？ それともロプウヒンの当面の政敵だったラチコフスキーか？ 闇の深さは測り知れぬのだ。何が出て来るか？ また何が潜んでゐるか？ ラチコフスキーはヴィッテともよかつた。あれだけの重大な申出の後にヴィッテがロプウヒンに釈然としていたのは偽りで、肚ではブレエヴェ内相と共にロプウヒンを徐